

# 琵琶湖を守る市民活動の デパート、野洲

## 山・川・里・湖のつながり再生に向けて



### 佐藤 祐一

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

家棟川の風景。家棟川の流域界と野洲市の市境が大きくオーバーラップしていることが行政・市民等の連携による活動の大きな鍵となっている。

「最近川の濁りがとれへんのや。数年前やったらこのあたりは底まで透き通ってたのに。」  
2010年、夏。私は野洲市を流れる家棟川で屋形船に乗りながら、この道50年の琵琶湖の漁師松沢松治さんから話を伺っていた。以前のことは分からないが、確かに今の家棟川は濁りが強く、きれいとは言えない。一方で私は、琵琶湖やその流入河川の水質について研究していることもあり、家棟川の水質が1980

### 1 何でもやって いる、野洲

年代以降、有機物、窒素、リンともに濃度が減少傾向にあることも知っていた。データ上はきれいになっている、でも地元の人には汚くなったと言う。この違いは何だろうか？そここそ、行政や専門家が進める環境保全の取り組みと、市民が求める環境とのギャップの本質があるのである。私にはこの家棟川と野洲市にとことん関わってみよう

あるときは一市民として、またあるときは研究者として関わるうち、驚くべきことに気がついた。それは、琵琶湖やその流域の環境を保全・再生する活動として思い当たるものほとんどが、すでに野洲市や家棟川流域で取り組まれているということだ。しかも、その多くが市民主導で実施されている。さながら「琵琶湖を守る市民活動のデパート」と言ってもよいだろう。本稿では、野洲市がそこまでパワーアップしてきた経緯と、また「山・川・里・湖のつながりの再生」をテーマに取り組まれている活動のいくつかについて、私の知る範囲でご紹介したい。

お金だけに依存しない新しいつながりを生み出していきます。

### 課題は遊び心で楽しむ

文化活動が主体の上に公益性が基本なので、収益は大きく見込めませんが、里山整備や子供の体験活動、エネルギー勉強会など、各々活動助成を受けることができましたので、事業としては継続可能になりました。しかし私たちの生計を立てるには至らないので経営の工夫が必要です。また今年度からは自治会との協力が不可欠です。里山は40年以上放置されて持ち主さえ無関心です。私たちもうまくいき始めてつい対話を怠った途端に、反発される経験もしました。

また自治会活動で地域に関わりたくなることもありますがこのように、一斉美化に誰が参加したかしないか陰口が出たり、出不足料の数千円を納めたり、急用で参加できなかった人に対して文句が出るなど、たとえつわぶが綺麗になっても、むしろ人の和が壊れる方向に働く例も多いようです。逆に、退職後に誰にも頼まれないのに美化を毎日やっている人もあ

り、その人との出会いで「自治会の役員に掛け合ってくるよ」と、落ち葉を「くるくる市場」に集められる方向が生まれました。そういう中で、私たちがいいことをしている顔で地域の人の心に無関心だったり、逆に監視しあうような慣行に従うのでは、「もっこ絆を」と叫んでも、すればするほど人の心は離れていくでしょう。

地域に小さなモノの環や人の和を生み出すには、各家庭での取り組みだけではなくて、特段の関心がなくても誰でもコミュニケーションに参加しやすくなるような遊び心、気楽さや簡単さに惹かれて、やりたくなった人から参加し、だんだん周りに広がって、全体に意識が高まっていくような仕掛けしたいですね。

今は価値が無いと思われる目の前に有るモノが生かせたら、次の豊かさが生まれ来る。目の前に居る一人の人が本当に生かされたら、その人の溢れる楽しさが次々と周囲の人たちに伝播して行く——一つのモノ、一人の人が本当に大事にされる気風が街づくりのエネルギーになっていくのではないのでしょうか。そんなキッカケづくりとなるよう願って、



幸せな  
まちづくり

片山弘子

頭でなく心で、3年目は隣近所や地域コミュニティの人と粘り強く対話が続けてみたいと思っています。

●かたやま ひろこ  
KINPO法人  
KIESS設立  
メンバー。鈴鹿市  
環境審議委員。科  
学と文化が一体  
となった街の健  
康づくりを通し  
て、「暮らし」の  
中に、人と人、人  
と自然の「新しい  
繋がり方」を根付  
かせる、市民が主役の社会変革を模索中。  
「鈴鹿カルチャーステーション」の運営と  
共に、「コミュニティ作りの日常をありの  
まま紹介する」普段着で探訪デー「泊  
二日。月」を開催。  
公式サイト  
<http://as-one-main.jp/ac/video.html>  
「鈴鹿カルチャーステーション」を起点に  
した「コミュニティ作り」(動画)